

老年看護学実習 I で看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち

高野真由美¹⁾ 松本佳子¹⁾

要旨

本研究は老年看護学実習 I において、看護学生が認知症高齢者との関わり時（以下、場面とする）に抱いた気持ちを明らかにすることを目的とした。結果【同じことを何度も話す】【理解不能な言動】【記憶障害】【易怒的言動】【不安な様子】【無反応】【対応できない自分自身】【認知症への偏見】【できることの発見】の9場面で、抱いた気持ちは46件であった。今回明らかになった場面から認知症による症状を知識として理解できない場合は戸惑い、困る気持ちがあった。しかし知識をもって現象を理解しその人の言葉の背景にある心理状態を押し量ろうとした看護学生は、何らかの意味があると受け入れ傾聴する気持ちになったと考える。一方、認知症の中核症状に起因し引き起こされた周辺症状による易怒的言動場面では、驚いたとする看護学生が多く、受け入れがたい気持ちであったと考える。よって、このような場面は看護学生の気持ちのフォローが必要ととらえられる

キーワード：看護学生 認知症 高齢者 気持ち 実習

I はじめに

わが国の急速な高齢化にともない、認知症高齢者人口は2014年で、420万人と推計されている。さらに厚生労働省は2015年1月7日、全国で認知症を患う人の数が2025年には700万人を超えるとの推計値を発表した。すなわち65歳以上の高齢者のうち、5人に1人が認知症に罹患する計算となる。このような状況を背景に、今後、認知症高齢者の患者の入院がますます増加する中、認知症ケアの必要性は介護福祉施設のみならず、一般病院においても重要視されてきている。つまり、認知症高齢者への看護の質の向上がさらにのぞまれるところであり、看護基礎教育における教育が期待されている。

しかし、認知症高齢者の症状とその対応は、その時その状況による違いや個人差があり認知症の学習を終えていても教科書通りの関わりができないことが多い。そのため本学の看護学生（以下、学生と略す）が実習にて認知症高齢者との関わり時に、不安や困難な思いなど何らかの負の気持ちを抱いた体験をもち、それが、カンファレンスの言動やまとめの

レポートから見受けられることがある。またその一方で、認知症高齢者と自然体で楽しさを感じながら関わる事ができたことなど、肯定的な気持ちを抱いた体験を述べる学生もいる。

認知症高齢者に抱く気持ちは、イメージや認知症高齢者観へ影響を与えると考える。大谷ら¹⁾は、看護者のもつ高齢者のイメージは看護に取り組む姿勢を形成する源となり、看護の質・内容に影響を及ぼすことを述べている。また、イメージを含む高齢者観に関する先行研究によると、専門職が肯定的高齢者観をもつ場合にはサービスの質は上昇し、否定的な高齢者観をもつ場合にはサービスの質は低下する²⁾とされている。すなわち、認知症高齢者との関わり時に抱く気持ちのありようからイメージや認知症高齢者観に影響し、援助の姿勢の形成や看護実践の質に関連するといえる。

先行研究では、看護学生が実習で関わった認知症高齢者に対する困難感に関する質的研究³⁾⁴⁾⁵⁾や、どのような感情や気持ちを抱いたかという研究が3件⁶⁾⁷⁾⁸⁾ある。しかし、ほとんどが困難感、感情、気持ちに関するデータを質的に分析しており、その時の場面や状況と合わせて分類し分析したものはな

1) 川崎市立看護短期大学

い。

本研究では、学生が老年看護学実習Ⅰの介護老人福祉施設において、認知症高齢者との関わり時にどのような気持ちを抱いたかを明らかにする。この気持ちを抱いた関わりを場面として明らかにすることで、認知症高齢者を理解するための演習やロールプレイなど具体的事例の資料とし、実践的で効果的な教育方法の工夫や教材開発ができると考えられる。そして、実践的で効果的な教育を受けることは、肯定的な認知症高齢者観の形成へと関連し、専門職として質の高い看護実践へ発展していくといえる。

用語の定義

気持ちとは、物事に接したときに心が動かされていると感じる感情や思い、考え。

Ⅱ 研究目的

老年看護学実習Ⅰの介護老人福祉施設において、学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ちを、場面とその時に抱いた気持ちとして明らかにする。

Ⅲ 研究方法

1 研究デザイン

質的研究

2 研究協力者（研究対象）

川崎市立看護短期大学の2年生で、老年看護学実習Ⅰの介護老人福祉センターで認知症高齢者と関わった学生で、研究協力の同意が得られた学生。

3 研究の方法、研究期間

1) データ収集期間

平成26年7月18日～8月8日

2) アンケート内容と調査方法

アンケートは「実習において認知症高齢者の方と関わったときに、どのような気持ちを持ちましたか？どのような時に、そのような気持ちになったのかを教えてください。」という内容で無記名自記式にて調査した。

3) 分析方法

学生のアンケートのなかで、認知症高齢者とのような場面で、その時どのような気持ちを抱いたかという内容で記述されている部分をスライスし切片化した。そして、場면을類似性に基づいて分類し、その時の気持ちをまとめた。分析にあたっては研究者2名で分析し妥当性を検討した。

4 老年看護学実習Ⅰの概要について

老年看護学実習Ⅰは、2年次前期の科目で単位数は1単位（45時間）の必修科目である。地域及び施設で生活する高齢者とのふれあいを通して、発達課題や特性を学ぶ実習である。（実習目的、目標、方法等については、表1を参照）

実習前には老年看護学Ⅰの講義の中で「認知症高齢者とのコミュニケーション」という講義を行っている。

老年看護学実習Ⅰの施設の介護老人福祉施設での実習は、特定の高齢者を担当せずフロアにいる不特定数の方々とコミュニケーションを通しての関わりとなるため必ずしも認知症高齢者の方との関わりがあるとはいえない。

Ⅳ 倫理的配慮

老年看護学実習Ⅰの最終カンファレンス終了後の授業時間外に、研究者から説明書を用いて研究の目的と趣旨を説明し、協力は自由意志に基づくこと、アンケートは無記名で研究協力の有無は全く成績に影響しないこと、提出を持って同意とすることを説明した。

また、調査内容を記載するにあたり否定的な気持ちが想起される可能性もあるため充分配慮し、何らかの相談があるときはいつでも対応する旨を伝えた。

アンケートの回収は、調査への協力や回答などについて、自由にゆとりを持って考えられるよう配慮し、1階事務室前に10日間程の期間で設置したボックスにて回収した。尚、本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。（承認 R48 番）

表1 老年看護学実習Ⅰの要項

I 実習目的

地域及び施設で生活する老年期を生活している健康な人、および介護が必要な人とのふれあいを通して、発達課題や特性を学ぶ。

II 実習目標

- 1 老人福祉センターまたは老人いこいの家を利用している高齢者とのふれあいを通し、高齢者の発達課題や特性を知る。
- 2 地域社会で生活している高齢者の健康に関するウェルネスについて考えることができる。
- 3 介護福祉施設での実習を通し、施設で生活する高齢者の特徴を理解する。
- 4 老人福祉関連機関で働く看護と協働する専門職について知り、看護の役割を考える。

III 実習期間および施設

- 1 期間：平成26年7月14日（月）～18日（金）または 28日（月）～8月1日（金）
- 2 施設：

川崎市内		単位数	
1	老人福祉センターまたは老人いこいの家	1 単位	45 時間
2	介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）		

IV 方法

- 1 老人福祉センターまたは老人いこいの家で高齢者と1日をともに過ごし、ふれあいを通して学ぶ。
- 2 特別養護老人ホームで介護職員とともに1日行動し、日常生活のケアを通して高齢者との関わりを持つことで学ぶ。
- 3 実習での学びをレポートする。
- 4 実習での学びをもとにグループワークを行い、経験の共有を図る。

V 評価

実習記録及びレポート、出席状況、およびカンファレンスの参加状況等で評価する。

VI その他

[テキスト及び参考図書]

系統看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護学 医学書院
 高齢者福祉のしおり 川崎市健康福祉局長寿社会部 発行

V 結果

76枚配布し、回収は29枚（回収率38.2%）であった。

場面についての結果のカテゴリーは【】、その具体的な場面は【】、それらの場面の気持ちを〈 〉で示した。抽出された場面のカテゴリーは、【同じことを何度も話す】、【理解不能な言動】、【記憶障害】、【易怒的言動】、【不安な様子】、【無反応】、【対応できない自分自身】、【認知症への偏見】、【できることの発見】の9つで、その時の気持ちは46件であった（表2参照）。

最も多かったのは【同じことを何度も話す】で、【同じことを何度も話される】と、〈戸惑った〉気持ち、〈困ってしまった〉、〈迷った〉、〈どこもなく不安〉になっていた。そして、何度も繰り返す言葉に〈面倒くさい〉という気持ちも抱いていた。また、【息子に関する発言の多さ】に〈戸惑った〉、【トイレに行った直後なのにトイレと言っている】と、【トイレに行ったことを忘れてしまうことにどう対応するか】〈悩んだ〉気持ちがあった。中には、〈家族として関わり続けることは不可能〉とも答えていた。その一方で、〈ていねいに返していけば会話は成立していたので嫌な気持ちにはならなかった〉ことや、〈個別性だと受け止め関わるのがその人の心を開く〉、〈すんなり受け止めることができたと思う〉と答えていた。また繰り返し、【しきりに「お母さん、お母さん」と言う】のは、〈何かしらの意味がその人の中で存在するのだろうと感じた〉とあり、〈傾聴することが大切〉と感じていた。

次の【理解不能な言動】は【話が噛み合わない】時に〈悩んだ〉。そして〈コミュニケーションが難しい〉と感じていた。また、【話が聞き取れない】と〈困った〉が、【何を言っているのか意味不明】であっても〈個性があり、一人一人の世界観があると感じた〉。そして、【本当かウソか分からない話】でも〈受け止めることができた〉。さらに、【つじつまの合わない話】でも〈その方の世界観に話を合わせて話をしようと思う〉気持ちを持っていた。

【記憶障害】は、【自分の顔、場所を覚えていてくれない】ことに〈一瞬戸惑った〉、〈悲しかった〉、

〈冷静でいられる反面ショックを受けている自分がいた〉。また【思い出せなかったり、分からない】ことは、〈その人にとっても辛いことなのだと思う〉と、相手の立場から感じていた。

【易怒的言動】では、【大声で叫ぶ怒鳴る】場面で〈驚いた〉、【手ではられる】という時に〈ビックリ〉していた。その一方で、〈すんなり受け止めることができていたように思う〉こともあった。しかし、【暴力をふるう】時には、〈看護師としては我慢できるが、家族として関わることは不可能だと思う〉という気持ちもあった。

【不安な様子】は、【不安でどうして良いかわからない利用者を前に】、〈自分の記憶のひとつひとつ薄れていくのは怖く不安だと思う〉。そして、不安な様子の〈利用者の方と意思疎通ができると安心〉する気持ちになっていた。

【無反応】は、声をかけても【反応がないことに対して】、〈私が何か悪いことをしてしまっただろうかと悩んだ〉が、認知症ということで〈納得した気持ちがあった〉。

【対応できない自分自身】では、【私は困った顔をしてしまう】時に〈とても悲しい〉、また【話を流す術しか知らない】自分自身に対して〈情けない〉気持ちであった。しかし、【ただ隣に座っているだけ】の場面に、〈側にいるだけでもコミュニケーション。言葉だけじゃない〉ということを感じていった。

【認知症への偏見】では、【認知症だから…】ということから〈戸惑い〉と、〈レクリエーションが出来ない、上手く話せないのではという不安〉など〈マイナスな感情〉があった。

【できることの発見】は、【非言語的コミュニケーション】で〈言葉や身体動作、タッチングなどでもコミュニケーションができる実感〉や、【実際に会話もできる方が多く、レクでも難しい動作もできていた】ことで、〈認知症があても何もできない訳ではない〉ことの発見や、【初対面の自分たちを受け入れる】〈順応の高さに驚き〉、【昔の事や人生のことを明るく話す】場面に、〈嬉しく思い癒された〉気持ちになっていた。

表2 認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ちと場面

場面		気持ち
カテゴリー	具体的場面	
同じことを何度も話す	・同じことを何度も話される	・戸惑った (3件)
		・困ってしまった
		・迷った
		・どことなく不安
		・面倒くさい
・しきりに「お母さん、お母さん」と言う	・家族として関わり続けることは不可能	
	・難しい	
	・すんなり受け止めることができたように思う	
	・ていねいに返していれば会話は成立していたので嫌な気持ちにはならなかった。	
・息子に関する発言の多さ	・傾聴することが大切	
	・個別性だと受け止め関わることでその人の心を開く	
	・何かしらの意味がその人の中で存在するんだろうなと感じた	
	・戸惑った	
理解不能な言動	・トイレに行った直後なのにトイレと言っている	・悩んだ
	・話が噛み合わない	・コミュニケーションが難しい
	・何を言っているのか意味不明	・個性があり、一人一人の世界観があると感じた
	・本当かウソか分からない話	・受け止めることができた
	・つじつまの合わない話	・受け止めることができた
記憶障害	・話が聞き取れない	・その方の世界観に合わせて話をしようと思う
	・自分の顔、場所を覚えていてくれない	・困った
	・思い出せなかったり、分からない	・悲しかった
易怒的言動	・大声で叫ぶ怒鳴る	・冷静でいられた反面ショックを受けている自分がいた
	・手ではらわれたり	・一瞬戸惑った
	・暴力をふるう	・その人にとっても辛いことなのだった
不安な様子	・不安でどうして良いのかわからない利用者を前に	・驚いた (2件)
		・すんなり受け止めることができたように思う
無反応	・反応がなかったことに対して	・ビックリ
		・看護師としては我慢できるが、家族として関わることは不可能だと思った
対応できない身	・私は困った顔をしてしまう	・自分の記憶がひとつひとつ薄れていくのは怖く不安だと思った
	・話を流すことの術しか知らない	・利用者と思慮疎通ができると安心
	・ただ隣に座っているだけ	・私が何か悪いことをしてしまったらどうかと悩んだ
認知症への偏見	・認知症だから…と、思っていた	・納得した気持ちがあった
		・とても悲しい
		・情けない
出来ることの見	・非言語的なコミュニケーション	・側にいるだけでもコミュニケーション。言葉だけじゃない
	・初対面の自分たちを受け入れる	・戸惑い
	・実際に会話もできる方が多く、レクでも難しい動きもできていた	・レクリエーションが出来ない、上手く話せないのではという不安
	・昔の事や人生のことを明るく話す	・マイナスな感情
見	・言葉や身体動作、タッチングなどでコミュニケーションできると実感	・言葉や身体動作、タッチングなどでコミュニケーションできると実感
	・順応の高さに驚き	・順応の高さに驚き
	・認知症があっても何もできない訳ではない	・認知症があっても何もできない訳ではない
	・嬉しく思い癒された	・嬉しく思い癒された

VI 考察

認知症高齢者との関わりで、気持ちを抱いた場面として最も多かったのが【同じことを何度も話す】であった。これは、認知症で出現する中核症状の代表的な記憶障害が原因となって生じたものである。その他に、中核症状に関連するものとして【理解不能な言動】、【記憶障害】の場面があった。

最も多かった【同じことを何度も話す】の気持ちでは、戸惑う、困る、迷うことが多く、受け止めることの難しさを感じていた。その一方で、すんなり受け入れ傾聴する大切さを感じている学生もいた。日川⁹⁾は、認知症による記憶障害や知的能力障害、心理的状态を分析できなければ看護を考えることは難しいと述べている。すなわち、同じ言葉を繰り返かえす現象を認知症による記憶障害によるものであることを知識として理解できない学生は、戸惑い、困り混乱するのみで、面倒くさいという気持ちにまで至ったと考えられる。しかし知識をもって現象を理解し、さらにその人の繰り返す言葉の背景にある心理状態を推し量ろうとした学生は、繰り返す言葉に何らかの意味があると受け入れ傾聴する気持ちになったと考えられる。

【理解不能な言動】については、悩み困っている学生もいたが、受け止める気持ちが多かった。茂木は¹⁰⁾、「理解しがたい言動に直面した場合、単なる認知症の一つとして扱うのではなく、どのような原因から生じているのか常に観察しながら相手の世界を理解することが認知症高齢者を理解するうえで重要である」と述べている。今回、学生が経験した理解不能な言動の場面で、単に認知症の症状としてとらえただけでなく、一人一人の世界観を感じ、その世界観に合わせようとした気持ちは、認知症高齢者を理解していくうえで重要な気持ちであったといえる。

【記憶障害】では、短期記憶障害のため、つい先ほどの記憶がスッポリなくなる状況に戸惑っていた。その場面の状況を、今ここで関わっている自分の顔と場所の記憶の喪失という現実的な事実から実感し、戸惑いだけでなくショックや悲しみといった気持ちにもなったと推察される。しかし、学生のなかには自分中心の気持ちに限らず、その人にとっても辛いことなのだと、相手の身になって共感的に受け止めており、援助者として持つべき大切な気持ちと考えられる。

次にあげられた【易怒的言動】、【不安な様子】、【無反応】は、認知症の中核症状に起因して引き起こされた周辺症状(BPSD)からのものである。特に【易怒的言動】では、驚いたとする学生が多く、ビックリしていることから気持ちのゆれを察することができる。西村ら¹¹⁾は、「これまでの講義やマスメディアを通して認知症についての知識を深めていても、BPSDの出現には個人差があり、その内容には奇妙な言動であるため、初めて体験した学生は驚きの感情を先に抱くことがある」と述べている。今回、短期間の実習で、受け持ち制をとらず個別的な情報収集もないなかでの関わりは、相手のニーズを把握するのが困難であったと思われる。そのためニーズのズレから生じたと思われる突然怒鳴るなどの行為は、学生にとって受け入れがたい気持ちであったと考える。よって、このように易怒的言動のある状況においては、学生の気持ちのフォローが必要な場面ととらえられる。また、【不安な様子】、【無反応】では、自分が何か悪いことをしたのではないかと、学生が自身の行動を反省する気持ちがあった。これは、表面的な言動と反応に左右されており、その要因となる理解が不十分であることから抱いた気持ちであると推察される。

次の【対応できない自分自身】では、具体的な関わり場面からの要因は明らかではない。しかし、何か関わりの場面で対応をしたくてもできなかった学生自身の素直な気持ちであるととらえられる。側にいるだけでもコミュニケーションと、前向きな気持ちで答えている学生もいることから、安定した気持ちで寄り添うことも援助であると感じられることで否定的な気持ちにならないのではないかと考えられる。

【認知症への偏見】については、認知症だからという先入観からの戸惑いや、レクリエーションも出来ないだろうというマイナス感情が先行していた。吉本は¹²⁾、1～2年生では、マスメディアの影響や近親の認知症との関わりにより否定的なイメージを抱いていることを報告している。このことから、実習で自分自身が認知症に対し抱いている気持ちと向き合い、意識化する機会となる場面であったと思われる。しかし認知症という偏見にこだわることなく【できることの発見】ができた学生もいた。それは、自分たちを受け入れてくれた場面で順応の高さに驚き、レクリエーション場面では出来ることを発見す

ることができていた。小林は¹³⁾、「認知症の人と対峙するときに、障害された機能に目を奪われがちであるが、その人の持っている能力に着目し、その活用を考えることが大切である。」と、述べている。今回の関わり場面で認知症高齢者の出来ることの発見から、もっている強みを実感できていた。このような場面を経験することで、今後は認知症高齢者の強みを発見しケアに生かしていくことにつながると考えられる。さらに、昔のことや人生のことを話し教えてくれる場面で、学生は嬉しく思い癒される気持ちになっていたことから、認知症高齢者に対する肯定的なイメージや高齢者観をもつことに関連する経験にもなったといえる。

その他、【同じことを何度も話す】と【易怒的言動】の場面で、家族として関わり続けるのは不可能という気持ちの回答があった。前後の文章の意味合いから、この2つの場面からの気持ちは、学生自身の家族の中に認知症高齢者がいるか、それに近い体験をしてきたことでの気持ちが重なったととらえられる。奥村は¹⁴⁾、認知症高齢者へのイメージに、親や祖父母の態度、祖父母の関わりが影響していることを示唆している。すなわち、家族の中で良い認知症介護がされていれば肯定的なイメージで、上手くいっていない場合は否定的なイメージへ影響することが伺われる。しかし、草地は¹⁵⁾、実習後に認知症のイメージが、コミュニケーションのとり方、対象のペースに合わせる、寄り添う距離の取り方を学ぶことで、プラスへ転化したことも述べている。つまり、今後は、学生個々の生活背景なども考慮しながら、様々な実習場面で認知症高齢者へ抱いた気持ちについて配慮した教育的関わりをしていくことが大切であると考えられる。

Ⅶ 研究の限界と今後の課題

本研究のデータは、特別養護老人ホームにおける1日みの短期間の実習であり、学生の実習フィールドによっては、身体的介護が中心で認知症高齢者と関わる機会が無かった学生もいたことから、調査票の回収率が低かった。このことから、本研究のデータが全ての学生の代表データとは言い難い。しかし、今後の学内における認知症高齢者との援助場面のロールプレイングの資料とし、演習内容を検討していきたい。

Ⅷ 結論

老年看護学実習Ⅰで認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ちを、場面とその時の気持ちとして分析をした結果、以下の結論を得た。

- 1 場面は、【同じことを何度も話す】、【理解不能な言動】、【記憶障害】、【易怒的言動】、【不安な様子】、【無反応】、【対応できない自分自身】、【認知症への偏見】、【できることの発見】の9つであった。
- 2 それぞれの場面の気持ちには、戸惑い、迷い、困る、悩むなどの気持ちがあったが、その一方で、言動の背景にあるものをとらえて、受け止め傾聴しようとする気持ちと、相手の身になって考えようとする気持ちがあった。
- 3 周辺症状（BPSD）に関連した症状のある場面では、驚きショックを受けるなど否定的な気持ちがあったが、短期間の実習では、症状の背景にある相手のニーズまで把握できないため学生の気持ちのフォローが必要である。
- 4 認知症だから出来ないというマイナスな気持ちがあったが、レクリエーション場面などから出来ることなど強みを発見できていた。

Ⅸ おわりに

今回、老年看護学実習Ⅰで学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ちを、場面とその時の気持ちとして明らかにすることができた。今後、明らかになった各場面を参考にし、その場面から学べる内容を精選し、リアリティ感をもった学内演習のロールプレイングを展開したい。さらに、認知症の正しい知識を援助へ活かしたロールプレイングの学習を教育方法として取り入れていくことで、臨地実習における質の高い認知症高齢者看護へ繋げていくことを課題としていきたい。

引用・参考文献

- 1) 大谷栄子, 松木光子. 老人イメージと形成要因に関する調査研究. 日本看護研究学会誌. 第 18 卷, 14 号, 1995, p.25-38.
- 2) Coe RM. Professional perspective on the aged. The Gerontologist. vol7, no.2, 1967, p.114-119.
- 3) 千葉京子, 草地潤子. 介護老人保健施設における認知症高齢者との関わりで看護学生が対応困難となる場面の特性. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 19, 2006, p.9-16.
- 4) 古市清美他. 認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護学生の困難感を抱いた場面. 日本看護学会論文集. 看護総合. 42, 2012, p.362-365.
- 5) 嶋田美香他. 学生が認知症高齢者と接するときを感じる困難感の内容とその対処行動. 九州国立看護教育紀要. 9, 1, 2007, p.8-14.
- 6) 西村美里, 大町弥生, 中山由美. 認知症高齢者に看護学生が抱いた感情. 藍野学院紀要. 22 卷, 2008, p.12-21.
- 7) 山本夏海, 中島洋子. 看護学生の認知症高齢者に対する認識と受容感情 - 実習での受け持ち有無による比較 - 第 37 回日本看護学会論文集老年看護. 2007, p.112-113.
- 8) 榎本明子他. 看護学生の認知症高齢者との関係 - 印象に残っている場面での気持ちに焦点をあてて - . 川崎医療短期大学. 28 号, 2008, p.39-45.
- 9) 日川幸江, 川崎裕美. 痴呆症の看護に困難を感じる学生の指導方法の検討. 看護展望. 26 卷, 12 号, 2001, p.1392-1395.
- 10) 茂木光代. 認知症高齢者にみられる対応困難な症状に対する介護職員の捉え方. 日本看護学会論文集 - 老年看護 -. 第 38 回, 2007, p.211-213.
- 11) 前掲 6)
- 12) 吉本知恵, 横川絹江. 看護学生の痴呆性老人に対するイメージと看護観及び影響因子 - 3 年制看護短大生の学習進度による比較. 14 卷, 1 号, 2004, p.35-45.
- 13) 小林敏子. 認知症ケアの原理・原則. 認知所ケア標準テキスト改定 3 版認知症ケアの基礎. ワールドプランニング. 2013, p.83.
- 14) 奥村由美子, 久世順子. 高齢者のイメージに関する文献研究 - 一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージ -. 日本福祉大学情報社会科学論集. 第 11 卷, 2008, p.57-64.
- 15) 草地潤子, 千葉京子. 老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージの変化. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 20 号, 2007, p.15-24.